

編集後記

今年の全国若手哲学研究者ゼミナールは箱根湯本の温泉で開催されました。温泉につられて参加してきた人もいたのか、一種異様な盛り上がりの中、議論と親睦が深められました。

ところで私は今年が二回目の参加、一昨年の様子すら知らない新参者です。その私がシンポジウムの報告者を務め、さらに（酩酊状態のときにはほとんど欠席裁判のような形で押し付けられたのですが）この『哲学の探求』の編集という大任を仰せつかりました。不慣れな編集作業ゆえ、執筆者の方々には多大な御迷惑をおかけしたことをお詫びしなくてはなりません。そのような不手際にもかかわらず、この雑誌が今年もこのような形でなんとか発行できたのは偏に、お忙しい中渾身の筆を揮って下さった執筆者の方々と、有形・無形のご支援を下さったOB・OG、歴代世話人の方々と、さらにこの不況の中こうした手間のかかる専門学術雑誌を破格の学生料金で引き受けて下さった今日和印刷さんのお陰です。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

なお、本誌には掲載されませんでした。当日は次の

ような研究発表が行われ、いずれにおいても活発な議論が交わされました。

・『判断力批判』における崇高論について 石井 稔

・「自己意識」の概念をめぐる 清塚 邦彦

・情動論 平田 一郎

・〈ニーチェの言語的世界〉のための準備報告 花岡 丈太郎

願わくば、このゼミナールとこの雑誌が存続し、そこに多くの新しい研究者の皆さんが集ってほしいものです。いわゆる学会と異なり権威も伝統もないこの若手ゼミは、悩み多き頑固な若者たちの、「連帯の場」というほど固苦しくない、気安く参加できる「連絡の場」といった感じです。新しい情報と新しい発想と新しい交友を求めて、新しい仲間が一人でも多く参加してくれることを期待します。

それではまた来年の夏に、できればどこかの温泉でもお会いしましょう。
(小野原)